

## 『無秩序の仮面』再考

— ピータールー虐殺事件とシェリーの改革のレトリック (1) —

A Reinterpretation of *The Mask of Anarchy*:  
Peterloo Massacre and Shelley's Rhetoric of Reform (1)望 月 健 一  
MOCHIZUKI Ken-ichi

## 1. 『無秩序の仮面』成立の背景

## (1) 「ピータールー虐殺事件」

1819年3月、ジョセフ・ジョンソン、ジョン・ナイト、ジェイムズ・ローら急進派 (Radicals) を中心に、イングランド議会改革要求を目的とするマンチェスター愛国者連盟 (Manchester Patriotic Union Society) が結成された。時代は、後のジョージ4世が、精神異常をきたしたジョージ3世に代わって国を治めた摂政時代 (Regency)、首相は国民の運動に対して弾圧政策で臨んだことで知られる第2代リヴァプール伯であった。

「ピータールー虐殺事件」(Peterloo Massacre) は、1819年8月16日マンチェスターで起きた、官憲による民衆弾圧事件である。この名称は、この事件が発生した広場の名称「ピーターズ」(Peter's) と、その4年前にウェリントン将軍がナポレオンに対して歴史的勝利をおさめた「ワーテルロー」(英語読みでは「ウォータールー」Waterloo) を組み合わせて皮肉って名付けられたもので、別名「マンチェスター虐殺事件」とも呼ばれる。この事件は、マンチェスターのみというよりはむしろランカーシャー郡全体の改革派の集会に対して官憲が武力行使を行うことによって発生したもので、当日の事の成り行きは、およそ以下の通りである。<sup>1</sup>

正午までにセント・ピーターズ広場に5万人以上の群集が集まり、ウィリアム・フルトン他9名の治安判事達が演壇と治安判事待機所の上に2本の通路をつくった。午後1時20分頃、ヘンリー(オレター)・ハント、リチャード・カーライル他、演説者達が入場した。しかし1時30分頃、フルトンはこれを危機的事態と判断、急遽ハントら逮捕を決定し、軍隊出動を要請した。付近にいた義勇騎兵団 (The Manchester & Salford Yeomanry) がこれに応じたが、約60名ほとんど全員が酔っていたと伝えられる。群集の中に腕と腕を組み合わせる、通路をふさぐ等、ハントら逮捕を阻止する者達がいたため、義勇騎兵はサーベルを抜いて群集に切りつけた。そして1時50分頃、群集が義勇騎兵を攻撃したとして、ついに正規軍軽騎兵 (15<sup>th</sup> Hussars) の援軍の出動が要請された。2時頃までには群衆のほとんどが退散したが、死者は11名、負傷者は約400名(うち女性約100名)にものぼった。後日、治安判事達には、内相アディントンより感謝状が贈られた。

その後、カーライル、ロー、アーチボールド・プレントイス等、会場にいた改革派数名からの情報が新聞記事やパンフレットとして公刊され、大きな反響を呼んだが、その一部が、当時イタリアにいた詩人・革命思想家パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822) の元にも届いたものと考えられる。この事件は、この年に彼が一気に書き上げた『無秩序の仮面』(*The Mask of Anarchy*) の直接の執筆の動機となったが、特にこの集会における改革派の圧倒的な人数、官憲の武力弾圧に対して一部の民衆が抵抗を試みたという事実は、非暴力的不服従を信条とするシェリーを大いに刺激したのと考えられる。

なお、このような改革を求める集会が二度と開かれないように、政府は 1832 年、「治安六法」(‘Six Acts’) を定めた。これは、「軍事教練防止法」、「武器没収法」、「軽罪法」、「煽動集会禁止法」、「冒流的・煽動的文書誹謗罪法」、「新聞印紙税法」の 6 つから成り、中でも、急進運動のような軽罪は裁判所ではなく治安判事が処理できるようにした「軽罪法」、治安判事の同意なしに 50 人以上の者が政治集会を開くことを禁止した「煽動集会禁止法」は、「ピータールー虐殺事件」の時のような大規模な集会を未然に防ぐことを念頭に定められたものであることは、ほぼ疑う余地がない。

## (2) ニュースを聞いたシェリーの反応

既に述べたように、『無秩序の仮面』の創作の直接の動機は、シェリーの愚かな権力に対する激しい怒りであった。このことは、1819 年 9 月 6 日チャールズ&ジェイムズ・オリアー宛の書簡に明らかである。<sup>2</sup>

The same day that your letter came, came the news of the Manchester Work, and the torrent of my indignation has not yet done boiling in my veins. I wait anxiously [to] hear how the country will express its sense of this bloody, murderous oppression of its destroyers. “Something must be done. What, yet I know not.”

あなたの手紙が届いたのと同じ日に、マンチェスターの事件のニュースがはいってきました。そして今もなお、止めどもなく湧き上がる怒りが血管の中で煮えたぎるような思いです。この破壊者の手による、人殺しも辞さない血生臭い圧制に対して祖国がどんな反応を示すか、ぜひとも知りたいところです。「何とかしなければならぬ。しかし、何をすべきなのか、私にはまだわからない。」

括弧内は、シェリーが同時期に書いた悲劇『チェンチ家』(*The Cenci*) のヒロイン、ベアトリーチェのせりふである。この引用箇所から、「ピータールー虐殺事件」のニュースを知った時のシェリーの怒りようは大変なものであったことがわかるが、この事件が直接の引き金となって執筆された『無秩序の仮面』が、ただ怒りをぶちまけただけの作品に終わっていないことは注目に値する。この詩を一読して印象に残るのは、そのスピード感や力強さであるが、それと同時に表現上の抑制が効いていて、『ピーター・ベル三世』や「オジマンディアス」などにも通じる風刺精神がここでも健在であることは決して見逃すべきではない。

## (3) 『エグザミナー』誌には不掲載

およそ 2 ヶ月間で『無秩序の仮面』を書き上げたシェリーは、早速原稿を当時『エグザミナー』誌の編集長であった友人リー・ハントのもとに送った。しかし、この詩は結局、シェリー没後 10 年後の 1832 年まで出版されなかった。この詩の初版の「序文」はハント自らが執筆しているが、その中で彼は、この詩の掲載を見合わせた理由について、以下のように述べている。<sup>3</sup>

I did not insert it [i. e. *The Mask of Anarchy*] because I thought that the public at large had not become sufficiently discerning to do justice to the sincerity and kind-heartedness of the spirit that walked in this flaming robe of verse.

私は、これを掲載しなかった。というのは、社会全体がこの詩の炎の衣を着て歩む誠意と思いやりの精神を充分、正当に理解し、これに対応するに至っていないと考えたからである。

この引用箇所にはまだ先があって、以下の二つのことが述べられている。

- ① この詩は被支配者階級、即ち「苦しんでいる人々」 (“the suffering part of people”) にさえ理解されないのではないかと懸念されたこと。
- ② 支配者階級、即ち、「(改革側) 共通の敵」 (“the common enemy”) にも、つけ込まれる恐れがあったこと。

いずれにしてもハントは、1819年の時点でこの詩を公表することは危険であると判断したのである。さらには、この「序文」には書かれていないが、『無秩序の仮面』を掲載すれば、編集者のハント自身も投獄される可能性が充分にあったのである。

#### (4) 創作の基本的姿勢

『無秩序の仮面』執筆にあたってシェリーは、労働者階級の人々にも理解できるような配慮を行った。つまり、この詩は、当初より「秘教的」(esoteric)ではなく「公教的」(exoteric)な作品として着想されている。1819年11月のリー・ハント宛の手紙の中で、シェリーは次のように述べている。<sup>4</sup>

You do not tell me whether you have received my lines on the Manchester affair. They are of the exoteric species, and are meant not for the *Indicator*, but the *Examiner*.

マンチェスターでの事件を扱った私の詩を受け取ったとの回答がないようですね。これは一般大衆向けの詩であり、『インディケーター』誌ではなく『エグザミナー』誌のためのものです。

また、同時期の作品『チェンチ家』「序文」において、シェリーは自らの創作態度について次のように述べている。<sup>5</sup>

In other respects I have written more carelessly; that is, without an over-fastidious and learned choice of words. In this respect I entirely agree with those modern critics who assert that in order to move men to true sympathy we must use the familiar language of men.

その他の点では、私はそれ程注意を払わずに書いた。つまり、言葉を選択するにあたって、あまり気難しくなったり学者ぶったりしなかったのである。この点については、人々を感動させて真に共感させるためには人々の日常語を用いるべきであるという現代の批評家達の意見に全く賛成である。

2行目の“those modern critics”とは、具体的には『叙情歌謡集』(*Lyrical Ballads*)「序文」を書いたウィリアム・ワーズワスを指すものと考えられる。しかし、“critics”と複数形になっているので、あるいはこの詩集の共同執筆者である S. T. コールリッジも、ここに含まれているのかもしれない。もちろん、これは『無秩序の仮面』についてのコメントではないのだが、少なくとも、この時期のシェリーに、作品のジャンルによっては庶民の日常語を用いて誰にでも理解できるように書く必要がある、という意識があったことを裏付けるものではないだろうか。ともあれ、とかく難解と見られることの多いシェリーにも、文学の大衆化の時代にいち早く対応するような側面があったことは注目に値する。

また、『無秩序の仮面』でシェリーが提唱していることは、いわばアウトサイダーの立場からの提言であるということも指摘しておきたい。事件が発生したイングランドから遠く離れたイタリアにいたからこそ、シェリーは公平かつ自由な立場で思い切った発言を行うことが可能だったのである。このことは例えば、彼がカト

リックにもプロテスタントにも組みせず自由な立場にあったからこそ、『アイルランド人民に告ぐ』(*An Address to the Irish People*) がそれなりに説得力のある論文になっていることを思い起こせば、一層よく理解できるのではないだろうか。

## 2. 修辞上の特徴

知性、想像力、言葉の運用能力が必ずしも高いとは言えない労働者階級の人々を対象に書かれたという成立の事情から、『無秩序の仮面』には、シェリーの他の作品には見られない修辞上の特徴が見られる。ここでは、以下の6つの点を指摘しておきたい。

### (1) 平易な表現

シェリーの詩作品をことごとく酷評した批評家F. R. リーヴィスは、『無秩序の仮面』だけは例外的に優れたものとして賞賛し、「もしシェリーが『無秩序の仮面』のような精神で自分の才能を使い、育てておれば、彼ははるかに偉大な、はるかに読むに耐え得る詩人となっていたであろう (“Had he used and developed his genius in the spirit of *The Mask of Anarchy* he would have been a much greater, and much more readable, poet.”)」とまで言い切っている。<sup>6</sup> つまり、この作品はリーヴィスに褒められるくらいに変わった詩なのであるが、その主な原因として、この詩には一般庶民が日常的に使う語彙が使用されており、イメージが単純明快で分かりやすいという点が挙げられるだろう。要するに、リーヴィスでも分かる詩ということになるだろうか。

この詩の詩形は4歩格4行1スタンザを基本とするバラッド形式であるが、これはワーズワス、コールリッジ合作の『叙情歌謡集』を意識したものとの見方も可能である。関係詞や従属節の使用は極力避けられ、読者の記憶に残りやすい力強く明快な詩的イメージが特徴的である。『無秩序の仮面』86~101行目を引用する。

When one fled past, a maniac maid,  
And her name was Hope, she said:  
But she looked more like Despair,  
And she cried out in the air:

その時、狂乱の乙女が前をかすめ通った。  
私の名は「希望」、と彼女は言った。  
だが、彼女はむしろ「絶望」のようだった。  
そして、虚空に向かって、こう叫んだ、

“My father Time is weak and grey  
With waiting for a better day;  
See how idiot-like he stands,  
Fumbling with his palsied hands!

「私の父「時」は、よき時代を待ち望みつつ、  
弱り、白髪になってしまった。  
見よ、彼が中風のように手をもじもじさせて  
阿呆のように立ちすくむのを。

“He has had child after child  
And the dust of death is piled  
Over every one but me—  
Misery, oh, Misery!”

「父が次々と子を生んだが、  
私以外は皆、死の塵に  
おおわれてしまった—  
みじめな、ああ何と、みじめな！」

Then she lay down in the street,  
Right before the horses' feet,  
Expecting, with a patient eye,

それから彼女は路上で  
馬達の足の前で横たわり  
辛抱強い目つきで「殺人」、

Murder, Fraud and Anarchy.

「欺瞞」、そして「無秩序」を待ち続けた。

リーヴィスは、この箇所を引用し、「その非凡な純粋さ、強さ (“its unusual purity and strength”）」を賞賛し、「ここには、いつもながらのシェリーの主情主義はない—何かに耽溺したり、力説したり、意志が墮落していたり、不適切なアプローチだったりすることはない。(“there is nothing of the usual Shelleyan emotionalism — no suspicion of indulgence, insistence, corrupt will, or improper approach.”)」と述べている。<sup>7</sup>

なお、この作品にはアレゴリカルな側面があるためか、リーヴィスはウィリアム・ブレイクの作品との親近性も指摘している。

## (2) パターン化された表現の効果的な繰り返し

『無秩序の仮面』に見られる特徴的なレトリックの一つとして、何種類かのパターン化された表現・文型の繰り返しが見られる。

‘Slavery’ とは何か? との問いかけに対する答えである “‘Tis to work and have such pay / As just keeps life from day to day. . .” (ll. 160-161) をはじめ、“‘Tis to. . .” で始まる文型は、詩中 6 回繰り返されている (l. 160, 168, 172, 176, 184, 190)。“Let a great Assembly be. . .” (l. 263) 以下、“Let + 動詞” のかたちは、計 11 回繰り返される (l. 263, 266, 295, 301, 303, 307, 311, 315, 323, 327, 341)。この文型が出現した直後、命令文が詩全体の基調となっている。“From the. . .” のパターンも、前二者よりは規模が小さいが、わずか 10 行程度の間に計 4 回繰り返され、それなりの効果をあげている (l. 270, 272, 275, 279)。

これらのパターン化された表現は、たたみかけるような、あるいは次第に勢いが増していくような雰囲気醸し出す上で非常に有効であり、この詩の急速なスピード感と相まって表現上絶大な効果をあげている。

## (3) 非暴力的な「主意」と暴力的な「媒体」の不均衡

『無秩序の仮面』には、「主意」(‘tenor’) と「媒体」(‘vehicle’) が不均衡な関係にある詩的イメージがいくつか見られる。つまり、この詩においては、あまりにもかけ離れたイメージが比喻によって結び付けられているのである。「主意」と「媒体」は、批評家 I. A. リチャーズの概念で、例えば “Time is money.” という文では、“Time” が「主意」で “money” は「媒体」である。ちなみに、この文全体は隠喩表現 (metaphor) である。まず、『無秩序の仮面』の 303~306 行目を引用する。

“Be your strong and simple words  
Keen to wound as sharpened swords,  
And wide as targets let them be  
With their shade to cover ye.

「あなた方の力強い単純な言葉を  
とぎ澄まされた刀の刃のように鋭く磨きなさい。  
そして、それを大盾のように使い  
あなた方の身を守りなさい。

ここにおいて、「言葉」は「刀の刃」に喩えられている。有名なことわざ “A pen is mightier than a sword.” では、「言葉」と「剣」は対比関係、あるいは優劣の関係にある（もちろん、ここでは「言葉」は「剣」に勝るものとされている）。ところがシェリーのこのスタンザにおいては、「言葉」と「刀の刃」が比喻によって結びつけられている。このことは、非暴力主義を提唱しながら、「刀」や「大盾」のイメージが持ち出されていることを意味している。次に、151~152, 368~369 行目を引用する（この 2 箇所は、まったく同文である）。

“Rise like lions after slumber  
In unvanquishable number—

眠りから覚めたライオンのように立ち上がりなさい、  
打ち破ることのできない数で。—

ここでは、抑圧された民衆が獐猛な「ライオン」に喩えられているにも関わらず、その民衆は流血を戒められていることになる。従って、これらの比喻表現は普通の意味での詩のレトリックとしてはお世辞にも巧いとは言いがたいのであるが、この詩の読者として想定された一般庶民には、むしろ単刀直入でわかりやすく、強烈な印象を与えるのではないだろうか。

#### (4) 明快な直喩

一般的に、シェリーの比喻には具体的なものを抽象的なものに喩えたものが多い。しかも、その抽象的なものが目に見える場合さえ見受けられる。しかし、『無秩序の仮面』において、シェリーは専ら抽象的なものを具体的なものに喩えた常識的な直喩 (simile) を用いている。その一例として、122~125 行目を引用する。

As flowers beneath May's footstep waken	「5月」の足音に花達が目覚めるように
As stars from Night's loose hair are shaken	「夜」のとけた髪から星達が振り落とされるように
As waves arise when loud winds call	風の大きな叫び声に波が立ち上がるように
Thoughts sprung where'er that step did fall.	思想は、その足の踏む所、至る所で湧き起こった。

ここで主題となっているのは、「思想 (“Thoughts”）」である。ここでは、改革派・労働者階級の「思想」が、目覚め、成長し、拡大していく様子が歌われているのである。ここは、「無秩序から秩序の回復へ」という方向性が示された、詩全体の中でも重要な箇所である。しかし、この抽象的なものである「思想」は、「花達」、「星達」、「波」という3つの具体的なものに喩えられている。次に『縛を解かれたプロミーシュース』から、同じく「思想」を主題とする箇所である、第2幕第3場 36~42 行目を引用する。

— Hark! the rushing snow!  
 The sun-awakened avalanche! whose mass,  
 Thrice sifted by the storm, had gathered there  
 Flake after flake, in Heaven-defying minds  
 As those by thought is piled, till some great truth  
 Is loosened, and the nations echo round  
 Shaken to their roots: as do the mountains now.

— お聞きなさい！あの押し寄せて来る雪の音を！  
 太陽に目覚めたなだれの音を！その固まりは  
 幾度も嵐のふるいにかけてられ、天をものともしない精神の中で  
 ひとひら、またひとひらと、そこに集まるのです。  
 ちょうど、思想が一つ一つ積み重なって、遂にある偉大な真理が  
 解き放たれて、国々があたりにこだまを響かせ合って  
 根底から揺さぶられるように。ちょうどそのように今、山々がこだまを響かせ合っています。

ここでは、「太陽に目覚めたなだれの音」が、新たに目覚めた「思想 (“thought”）」に喩えられている。つまり、いつものシェリーのように、具体的なものが抽象的なものに喩えられているのである。構文も複雑である。太陽熱に溶かされた「雪」が「なだれ」になる、それが、この引用箇所の下から3行目 “As” 以下で「思想」に喩えられる。そして、最後の行、中程の “as” 以下で、再び「山々」のイメージに戻っている。風景が心の

ように、心がまた風景のようになっているのである。『縛を解かれたプロミーシュース』においては、「思想」の積み重ねが遂に「ある偉大な真理 (“some great truth”）」を解き放つのである。この箇所と比較すると、先に引用した『無秩序の仮面』の 122～125 行目が、普通のシェリーらしからぬ普通の分かりやすい詩的イメージになっていることが、よく理解できるであろう。

### (5) 風刺的な要素

この作品は、シェリーが憤慨のあまり一気に書いたものであるにも関わらず、表現上抑制が効いていて、風刺精神さえ息づいている。このことは、詩の 5～13 行目で直ちに明らかにされる。

<p>I met Murder on the way— He had a mask like Castlereagh— Very smooth he looked, yet grim; Seven bloodhounds followed him:</p> <p>All were fat; and well they might Be in admirable plight, For one by one, and two by two, He tossed them human hearts to chew Which from his wide cloak he drew.</p>	<p>私は、途中で「殺人」に出会った。— 彼は、カースルローのような仮面をつけていた。— とてもすべすべした顔つきだが、きつい表情だった。 七頭の猟犬が彼についてきた。</p> <p>みんな太っていた。犬どもが申し分ない 状態にあるのも無理もない。 というのは、一つずつ、あるいは二つずつ、 彼は人間の心臓を、体に引き寄せるようにまとった 幅広いマントから取り出して投げ与えていたからだ。</p>
--	--

「カースルローのような仮面をつけ」た「殺人」という表現は、修辞上は飽くまでも直喩である。しかし、事実上、「カースルロー」＝「殺人」であることが、誰の目にも明らかである。しかし、ちょうど『縛を解かれたプロミーシュース』においてジュピターのみが「隷属する者」(slave) ではないのと同様に、カースルローのみが人殺しなのではない。実在人物である法務長官カースルローが人殺しであるのは、戦争や国内における弾圧政策で大勢の人の血を流しているからである。その追従者（貴族、議員等）が「太った犬」であるのは、その飼い主である「殺人」から寵愛や恩恵を受けているからに他ならない。

シェリーは、専制君主や暴君を詩に取り上げる際、正面きって怒りをぶちまけるのではなく、むしろ風刺、アイロニー等、‘detachment’ の姿勢をとることが多い。この引用箇所では、犬に人間の心臓を餌として与えるところなど、相当辛辣である。

### (6) 「聖書」をふまえた表現

『無秩序の仮面』においては「聖書」をふまえた表現が多く、中でも重要なのが、『新訳聖書』(*The New Testament*)の「ヨハネの黙示録」(‘The Book of Revelation’) への言及である。筆者は、これはシェリーが、「聖書」が当時のイングランドでは庶民が最も手にしやすい書物の一つであったことに配慮したことによるものと考えられる。つまり、これはこの詩を書くにあたってシェリーが示した労働者階級の読者に対する思いやりなのである。少なくともこの詩において、彼は『縛を解かれたプロミーシュース』、『エピサイキディオン』、『アドネイス』等の場合のように、プラトンやダンテに深入りするようなことはしていないのである。

例えば、この詩の 5～37 行目は、「ヨハネの黙示録」第 6 章第 1～8 節を下敷きにしたものと考えられる。カルロス・ベイカーによれば、『無秩序の仮面』の「4つの姿達」(four figures) は、「ヨハネの黙示録」に出てくる 4 人の騎手達を世俗化したものである。<sup>8</sup> 両者の比較対照表を次に示す。

'The Book of Revelation', 6:1-8	MA, ll. 5-37	実在人物
白い馬の騎手：弓、冠を持ち、勝利の上に勝利を重ねようとする。	Fraud	Eldon
火のように赤い馬の騎手：地上から平和を奪い、殺し合いをさせる。	Murder	Castlereagh
黒い馬の騎手：手に秤を持つ。	Hypocrisy	Sidmouth
青白い馬の騎手：「死」。黄泉が、これに従っている。	Anarchy	Prince Regent ?

しかし、ここで断っておかなければならないことは、この比較は厳密な意味での1対1対応ではないということである。また、『無秩序の仮面』の場合には、「黙示録」とは違って、4つの姿達のうち3つに実在人物（歴史上の人物）の名前があてがわれている。主役の「無秩序」(Anarchy)だけは誰にも喩えられていないが、ベイカーによれば、これは当時の摂政王子 (Prince Regent) を指す（後のジョージ4世）。<sup>9</sup>

この他、「ヨハネの黙示録」への言及箇所としては、第13章第16節、第19章第16節 (MA, ll. 36-37)、第18章第3節 (MA, ll. 48-49) 等の箇所が挙げられる。

以上、見てきたように、『無秩序の仮面』においては、高い詩の鑑賞能力や想像力を持たない読者の理解を超えるような詩的イメージ、比喩表現、他の高級な文学作品への言及等は、意図的に排除されている。一般的に言って、シェリーの詩では直喩がよく用いられるが（これとは対照的に、ジョン・キーツの詩には隠喩が多く見られる）、この詩においては彼の作品としては例外的に、比喩表現は短く単純明快なものに切り詰められている。この詩と一部創作時期の重なる『縛を解かれたプロミーシユース』において、シェリーの創作能力、作風の複雑さ、難解さは一つの頂点に達したと考えられるが、『無秩序の仮面』では、シェリーはそれとは明らかに正反対のアプローチをとっているのである。

— 未完 —

## <注>

<sup>1</sup> Spartacus Educational Home Page (<http://www.spartacus.schoolnet.co.uk/>)

<sup>2</sup> シェリーの散文・書簡の引用のテキストには *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley*, eds. Roger Ingpen & Walter E. Peck. 10 vols. Gordian, 1965. を使用した。また、引用箇所の日本語訳は、すべて筆者によるものである。

<sup>3</sup> *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* Vol. III, pp. 225-233.

<sup>4</sup> *The Complete Works of Percy Bysshe Shelley* Vol. X, p. 129.

<sup>5</sup> シェリーの詩作品の引用のテキストには *Shelley's Poetry and Prose: Authoritative Texts Criticism*, ed. Donald H. Reiman, W. W. Norton & Co., 1977. を使用した。また、引用箇所の日本語訳は、すべて筆者によるものである。

<sup>6</sup> F. R. Leavis, *Revaluation: Tradition and Development in English Poetry*, Penguin Books, 1964, p. 190.

<sup>7</sup> *Revaluation*, p. 190.

<sup>8</sup> Carlos Baker, *Shelley's Major Poetry*. New York: Russell & Russell, 1961, pp. 157-164.

<sup>9</sup> *Shelley's Major Poetry*, p. 161.